〈論　文〉

木 曽 の 方 言

長谷川　由　香

1．はじめに

一口に信州方言と言っても、北と南、また東と西とでは大きな違いが見られる。例えば、南西部の木曽と東部の上田とでは全く言語の様相が異なる。本稿では、木曽の方言について概略を紹介したい。まず東西方言の特徴から見た木曽方言を紹介する。次に、特に開田地域における音声的特徴について紹介し、最後に言語地図から見て取れる木曽方言の特徴について、上田方言と比較しながら述べたい。

（本稿は2018年２月24日に行われた上田女子短期大学リバティカレッジ講座の内容に基づいたものである。）

2．木曽のあらまし

まず、木曽の特色について、地理、気候、行政区画、観光の各面から簡単に紹介したい。木曽郡は長野県の南西部に位置している。「木曾路は全て山の中である」と島崎藤村が記した通り、総面積1,546.21㎢のうち実に93％を森林が占めている。人口は26,622人（2018年10月１日現在）、人口密度は17人/㎢である（上田市は281人/㎢）。平均気温は8月が22.8℃、１月が－1.7℃である。もとは11町村であったが、2005年のいわゆる平成の大合併により、山口村が岐阜県中津川市に、楢川村が塩尻市に編入され、木曽福島町・日義村・開田村・三岳村が合併して木曽町が発足した。現在の木曽郡は、木祖村・木曽町・上松町・大桑村・南木曽町・王滝村の６町村からなる。なお、2005年より前の資料で「木曽方言」という場合、旧山口村と旧楢川村も含まれることをことわっておく。

歴史的に見れば、木曽は旧尾張藩であり、江戸と京を結ぶ「中山道69宿」のうち11宿が木曽路におかれ、参勤交代大名や日光例幣使、東上する皇族等に盛んに利用された。見どころは、宿場のほか、御嶽山（3,067m）、木曽駒ケ岳（2,956m）、開田高原、寝覚ノ床、

阿寺渓谷、赤沢自然休養林など。また、特産物は漆器、ひのき・ねずこ木工品、そば、木曽牛、五平餅、朴葉巻、百草丸、すんき漬け、とうもろこし、などである。中京圏や関西圏からのアクセスもよいため、夏の避暑、冬の温泉やスキーなど、年間を通じて観光客も多い。

図１：木曽郡の位置　（https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/10koiki/kiso.htmlより）

３．方言区画

信州方言は、都竹(1949)によれば、山梨方言、静岡方言とともに「ナヤシ方言」に属しており、共通点を持つ。また、馬瀬によれば、信州方言は次の５つの区画に分けられる。各地域と方言特徴を紹介したい。

A　東北部方言：千曲川下流域、信越国境、下水内郡栄村一帯の方言。越後と関係が深く、越後魚沼地方や津南町の方言に近い。

B　北部方言:上･下高井、上･下水内(栄村除く)、更級、埴科(南部除く)の方言。越後中部方言的特徴は少しずつ減少する。東部方言と中部方言の影響もあり。

C　東部方言：南・北佐久、**上田**・小県、更級・埴科南部の方言。北部方言に顕著な越後中部方言的特徴はさらに減り、関東地方と共通する方言的特徴が現れ、群馬県境に近づくにつれ増す。

D　中部方言：南安曇(奈川除く)、北安曇、東筑摩、塩尻、諏訪、岡谷、茅野、上伊那の方言。越後中部方言的特徴は稀薄になる。静岡・長野・山梨方言的特徴が色濃く、西日本方言的特徴が若干現れ、伊那谷では漸増する。

E　南部方言：下伊那および上伊那南部、奈川村、および**木曽**の方言。大きく伊

那谷と木曽谷の方言とに二分される。静岡・長野・山梨方言的特徴に加え、西日本方言的特徴が他に比べて多い。

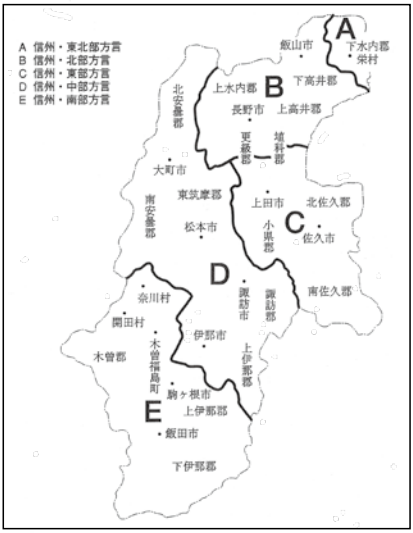

図２：信州の方言区画　　（馬瀬(2003)より）

このように、木曽の方言は「南部方言」であるのに対し、上田の方言は「東部方言」に属している。また、木曽では西日本方言的特徴が他に比べて多いこと、上田では関東地方と共通する方言的特徴、つまり東日本的特徴が現れることが指摘されている。

４．東西方言の区画から見た木曽方言

ここでは、東日本方言と西日本の方言の特徴を紹介し、木曽および上田地方における特徴の現れ方について述べたい。

（1）研究のはじまり

1902年、国語調査委員会により全国調査が実施された。我が国初の言語地理学的研究である。その結果、越中(富山)、飛騨・美濃(岐阜)、三河(愛知)と、越後(新潟)、信濃(長野)、遠江(静岡)の間に境界線があるとの指摘がなされた。

1953年、牛山初男により、北は新潟と富山の県境と、南は静岡、愛知の県境を結ぶ線が、境界線であることが示された。ただ、北は日本アルプスによってはっきりと境界線をなすが、南は混用が多く、一線をもって画することは困難とされた。

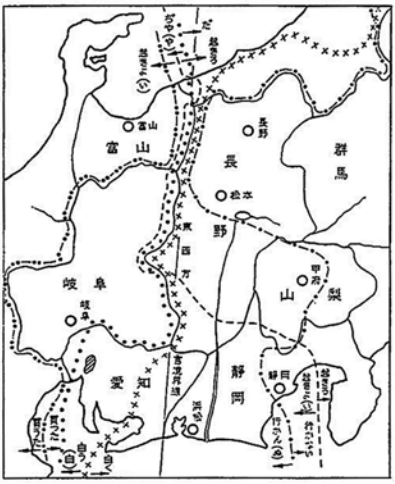

図３：語法から見た東西方言境界線　（牛山(1969)より）

（２）東西方言対立の指標

『長野県史』では、東西方言の対立の指標とされる文法的項目を選定し、県内全域で調査が行われた。

項　　目		東日本的特徴		西日本的特徴
①打ち消しの助動詞	□	行かない 行かね(ー)	□	行かん
②打ち消しの 助動詞過去形	□	行かなかった 行かねかった	□	行かなんだ
③打ち消しの 仮定条件	□	行かなければ 行かなけりゃ(ー) 行かねけりゃ(ー)	□	行かにゃー 行かねば
④断定の助動詞	□	これだ	□	これじゃ これや
⑤動詞の命令形 （一段動詞）	□	起きろ	□	起きよ 起きょ(ー)
⑥動詞のウ音便 （ワ行五段）	□	買った	□	こうた かーた
⑦動詞のイ音便 （サ行五段）	□	落とした	□	落といた 落てーた
⑧形容詞のウ音便	□	白くなる	□	しろ(ー)なる
⑨継続態と結果態	□	水がたまってる （継続・結果）	□	水がたまりよる(継続) 水がたまっとる(結果)

表１：東西方言の対立の指標チェック表　　（『長野県史』より作成）

上の表１でチェックされる項目が多いほど、東日本あるいは西日本の方言特徴を所持しているとされる。下の表２は県内各地の分布状況を表している。東日本的特徴は「＋」で、西日本的特徴は「－」で表しているが、「＋」の数に注目すると、上田ではほぼすべての項目（８～９項目）が「＋」であるのに対し、木曽では３～５程度である。このことからも、上田方言は東日本的特徴をより多く残し、木曽方言では西日本的特徴が色濃くなること、また木曽方言が東西方言の境界あたりに属するといわれる所以がよくわかる。

地域	地点	(1) 行かない	(2) 行かなかった	(3) 行かなければ	(4) これだ	(5) 起きろ	(6) 買った	(7) 落とした	(8) 白くなる	(9) 水がたまっている	計	
北信	栄村森	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋9	
	飯山市飯山	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋9	
	須坂市小山	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋9	
	長野市新諏訪町	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋9	
	小川村桐山	＋	－	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋7	
東信	上田市塩田	＋	＋	±	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋8	→ 上田
	佐久市中込	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋9	
	八千穂村佐口	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋9	
中信	大町市社松崎	＋	－	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋7	
	松本市島立	＋	－	±	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋6	
	楢川村奈良井	±	－	－	＋	＋	＋	－	＋	＋	＋2	
	上松町緑町	－	－	－	＋	＋	＋	－	＋	－	－1	┐
	開田村西野	－	－	－	＋	＋	＋	－	±	－	－2	├ 木曽
	南木曽町三留野	－	－	－	＋	±	＋	－	＋	－	－2	┘
南信	茅野市湖東	＋	－	±	＋	＋	＋	±	＋	＋	＋5	
	辰野町小野	±	－	±	＋	＋	＋	±	＋	＋	＋5	
	長谷村非持山	±	－	±	＋	＋	＋	－	＋	＋	＋3	
	中川村片桐	－	－	－	＋	－	＋	－	＋	＋	－1	
	天龍村大河内	－	－	－	＋	－	＋	－	＋	＋	－1	
岐阜県中津川市落合		－	－	－	－	－	＋	－	－	－	－7	

表２：主要地点東西方言対立一覧　（『長野県史』より作成）

それでは、上記の各項目について簡単に紹介したい。

まず、①打ち消しの助動詞について、「行かない」と言うとき、北信・東信は「イカネー」だが、木曽では北部を除き「イカン（イガン）」、つまり、西日本的特徴が見られる。参考までに、「見ない」の言語地図を示す。

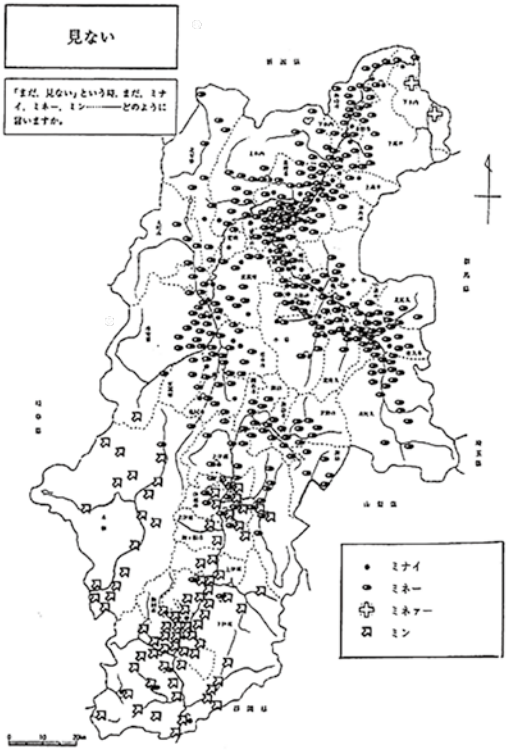

図４：「見ない」の分布　　（『長野県史』より）

②過去形の「行かなかった」となると、北信・東信は「イカナカッタ」「イカネカッタ」だが、木曽を含む中南信では「イカナンダ（イガナンダ）」となる。

③打ち消しの仮定条件、つまり「行かなければ」と言うとき、東北信では「イカナケレバ」が優勢だが、南下するにつれて西日本的な「イカニャー」が増え、木曽では全域を占めるようになる。これも木曽は西日本的特徴を有する。

一方で、④断定の助動詞、例えば「これだ」は県下全域で「コレダ」となり、東日本的特徴を示す。木曽も「コレダ」に属するが、岐阜の中津川に入ると「コレヤ」になる。

⑤動詞の命令形では、一段動詞の命令形「起きろ」の場合、「オキロ」が全県域に多いが、南信および木曽の南端では「オキョ」「オキヨ」と西日本的特徴が優勢となる。「オキレ」も見られる。

次に、動詞の音便の有無について見てみたい。「買った」が「コータ」となる⑥ウ音便

(ワ行五段動詞)は、木曽を含む県の全域で「カッタ」となる。「コータ」という西日本的特徴は見られない。また、⑦イ音便(サ行五段動詞)について、「人と話した」と言うとき、木曽では「ハナイタ」となり、西日本的特徴が見られる。木曽北部および開田では「ハネタ」も見られる。筆者の調査(1997)では奈良井(現塩尻市)と木祖村を境にイ音便の境界が認められた。

⑧形容詞連用形のウ音便について、「白く(なる)」は、県内のほぼ全域が「シロクナル」だが、開田や木曽の南端では「シロナル」「シローナル」の音便形が見られる。

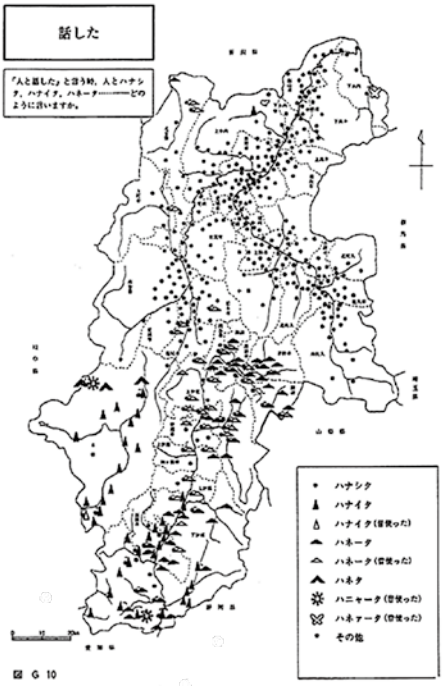

図5:「話した」の分布　　(『長野県史』より)

⑨継続態と結果態の有無、つまり「水がたまっている」と言うとき、「継続」の意味でも「結果」の意味でも使うかどうかについて、東日本は大部分がこの二つを区別しないが、西日本では区別する方言が多い。木曽では、「タマリオル(継続)」と「タマットル(結果)」の対立が見られる。街道を離れた開田などでは「タマリイタ(継続)」と「タマッテイタ(結果)」の対立となる。

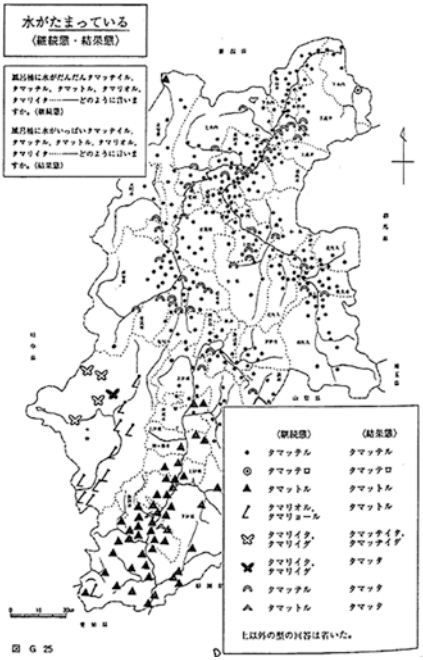

図６：「水がたまっている(継続態・結果態)」の分布　　(『長野県史』より)

以上、文法的項目から東日本的特徴と西日本的特徴とに区別すれば、南信の木曽および伊那のあたりは、ちょうど両方言の特徴を併せ持ち、境界の辺りに位置するようである。

５．特徴的な音声

中山道の街道筋を離れた地域には特徴的な音声が見られる。例えば、御嶽山のふもとの木曽町開田は街道から車で30分程度の地区だが、以前は峠を越えていく必要があった。ここでは、開田で観察される音声を紹介する。(語例は筆者(1997)より)

①「オ」にあたるところに「ヲ(wo)」が見られる。：中世末の京都語が残存している。「オンタケ(御岳)」以外のことばはみんな「ヲ」だ、と言われる。(例)　ヲトコ(男)、ヲンジン(恩人)、ヲト(音)。

②「エ」が「イェ」になる。：「エ」にあたるところに「イェ」がよく見られる。歴史的仮名遣いでは「絵(ゑ)」と「柄(え)」だったが、中世末には「イェ」に統合されていたとされ

る。(例)イェー(柄)、イェダマメ(枝豆)、イェンリョ(遠慮)、イェライ(偉い)など。「ヤ」が「イャ」、「ヨ」が「イョ」になることもある。(例)イャイテ(焼いて)、イョメ(嫁)など。

③ウェを用いる。:「ウェータ(沸いた)」「タウェタ(倒した)」など「ウェ(we)」の音が見られる。

④撥音の促音化:「ン」が「ッ(促音)」になる。「ン」にあたるところが促音化して「ッ」となる。県内では開田のみに見られる。なお、共通語では、有声音(b,d,z,g)の前に促音が来ることはない。(例)タッボ(田んぼ)、シッダ(死んだ)、サッド(三度)、サッザ(さんざん)など。

⑤鼻母音:もともと鼻濁音だったところの子音が脱落して鼻にかかった鼻母音のようになった語が見られる。(例)イソアシクテ(忙しくて)、テアミ(手紙)、ウサイ(うさぎ)、カウ(嗅ぐ)

⑥濁音化:語中・語尾のカ行音は大部分が濁音化する。(例)オモシロガッタヨ(おもしろかったよ)、ハガル　ワゲ(測るわけ)。

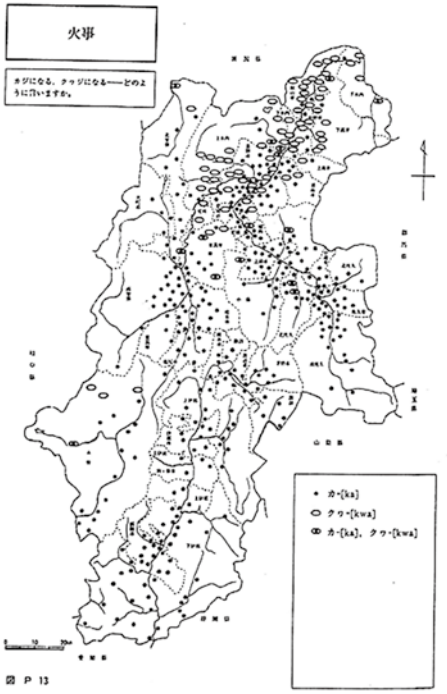

図７:「火事」の発音分布　(『長野県史』より)

⑦「クヮ、グヮ、クェ(合拗音)」を用いる。:「火事」を「クヮジ」という地域がある。北信の多くの部分で見られ、東信には混在し、木曽にも北部に見られる。漢語が日本に入ってきたころからの古音と言われる。(例)クヮン(食わん)、クヮシ　クェ(菓子食え)など。

以上、開田で観察される特徴的な音声を紹介したが、このほかにも、母音の交替(エ→イ、ウ→オ、等)、母音の融合と短音化(アガリ:明るい、キケル:聞こえる、等)、1拍名詞の長音化(ヒー:日、ケー:毛、等)といったさまざまな現象が観察される。また、開田方言は木曽の他の山間地域とともにシラビーム方言とされる。筆者が1990年代後半に調査を行った際、開田地域のみならず木祖村小木曽地区でも上記と非常によく似た音声が観察された。

また、当時の話者は70代であったが、このような音声も徐々に使用者は減りつつあるようである。それ以降の世代に残存しているかどうかは改めて確認する必要がある。

6．方言分布から見た木曽方言

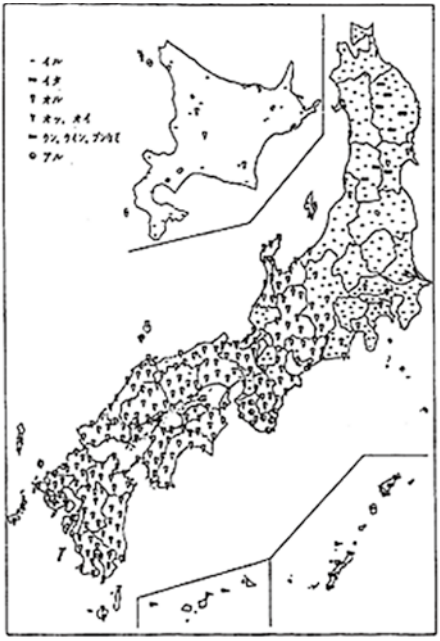

図８：「居る」の全国分布
(徳川(1979)より)

次に、いくつかの語彙について方言地図の分布を見てみたい。また、木曽方言の特徴を、上田方言とも比較しながらさらに紹介したい。なお、ここで紹介する方言地図は、主に「長野県言語地図」と「長野県方言地図」による。前者は『長野県史方言編』作成のため1974年～1978年ごろに、後者は『長野県方言辞典』作成のため2006年～2007年ごろに、それぞれ調査された結果に基づいている。両者には調査地点数等の差があるものの、比較することで方言の使用状況の約30年の経年変化を観察することができる。

（1）イルとオル

「人がいる」と言うとき、図８のように、東日本では「イル」、西日本では「オル」と言う。さらに、図９を見ると、県内はちょうど「イル」と「オル」の境界にあたり、北信・東信では「イル」、南信では「オル」と、はっきりした分布が見られる。木曽の中では、北部に「イル」が見られるものの、街道筋では「オル」が分布している。また、開田などの山間地域では「イタ」を用いるが、県内でもこの地域のみに観察される。ちなみに、イタの過去形は「イタッタ」となる。

（例）・アスコニ　ウサギ　イタニ（あそこにウサギがいるでしょう）

・サッキマデ　イタッタニ　ドゴ　イッツラヤー

（さっきまでいたのにどこに行ったのだろう）

「イタッタ」は、東北地方を中心に見られる（『表現文法全国地図』）より）。また、長野県教育委員会（1986）によれば、イタルはイルとアルが複合したものであるという。

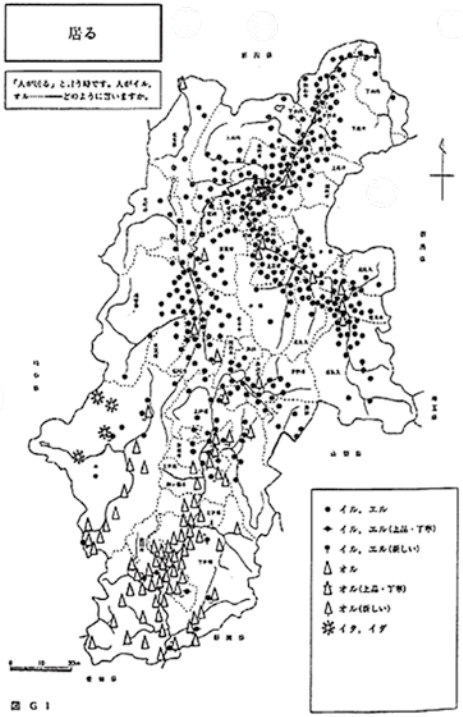

図９：「居る」の全国分布（『長野県史』より）

（2）スル

上田では「スル」と「シル」が混在するが、木曽では「セル」が優勢である。鳥居峠、つまり木祖村と木曽町日義の間が「シル」と「セル」の境界線のようである。筆者の調査(1997)でも、木祖村から日義に入ると、完全に下一段化が進んでいることがわかっている。ただし、連用１形(～タイ：願望)と連用２形(～タ：過去、～テ：テ形)では、セルはほとんど出ていなかった。

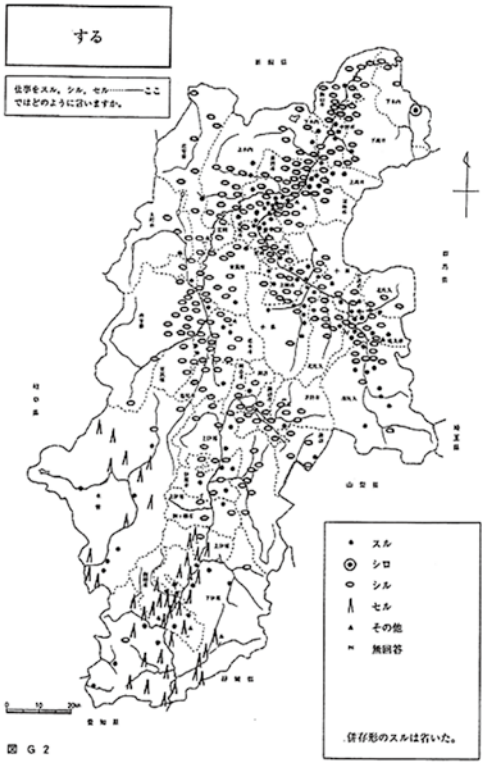

図10：「する」の全国分布(『長野県史』より)

（3）ズラ

「そうだろう」という時に、上田では「ダラズ」を用いるが、木曽では「ズラ」を用いる。「ズラ」は中信以南に広く分布している。「ダラズ」は「にてあらむとす」、「ズラ」は「むとすらむ」から来たという説がある。（馬瀬2003）

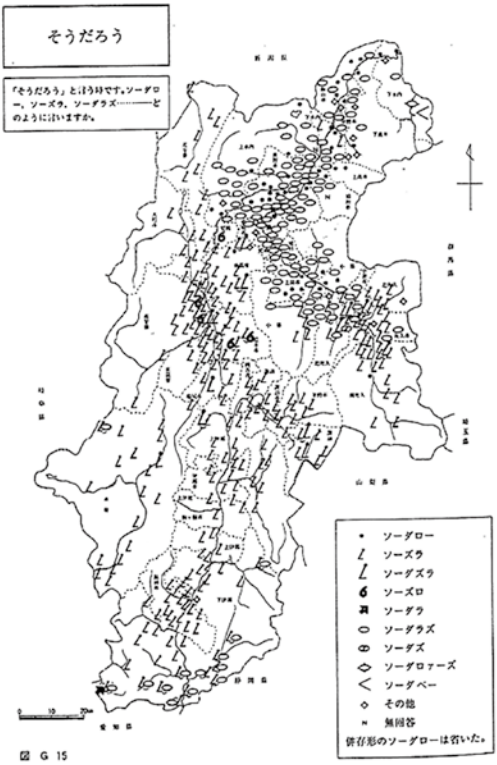

図11：「そうだろう」の全国分布　（『長野県史』より）

（4）疲れた

疲れたというとき、上田では「シンノー」「シンノ」だが、木曽では「テキナイ」「テキネー」が全域に、南部は「エライ」が分布する。木曽では「テキナイ」が「テキネー」に変わり、「ゴシテー」も流入しているが、それぞれ、中信、南信からの影響を受けている。

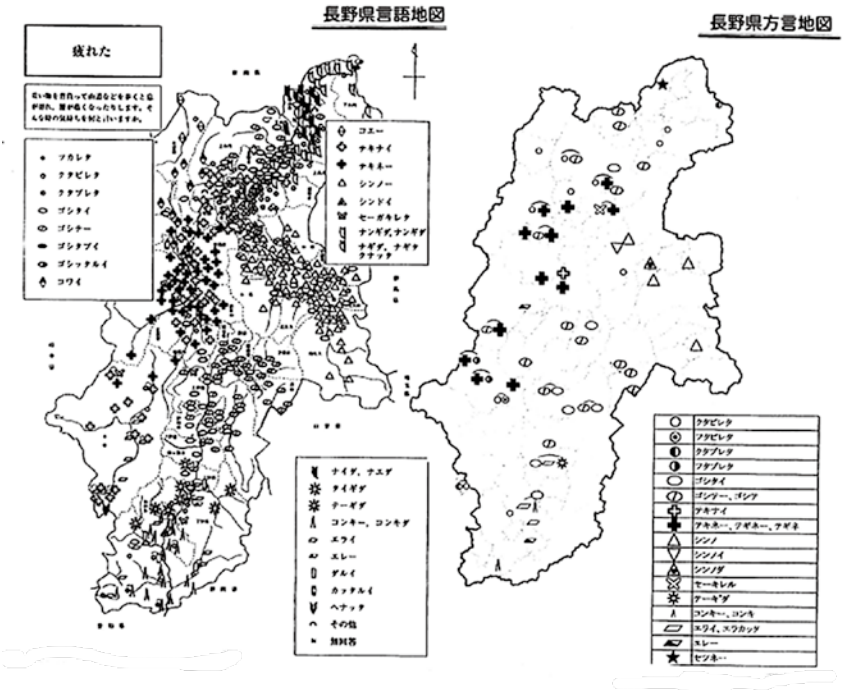

図12：「疲れた」の分布　（『長野県方言辞典』より）

（5）お風呂

小さな子どもがお風呂のことを言うとき、上田では「ベチャ」が多い。木曽では「ボチャ」が主流であるが、南部は「ブンブ」「ブー」、開田では「スイホロ」も分布する。「スイホロ」とは「据え風呂」のことであり、この語は健在である。ちなみに、「ボチャ」類は北関東から九州・沖縄まで広範に見られるが、「ベチャ」類は長野と山梨に特有の語である。

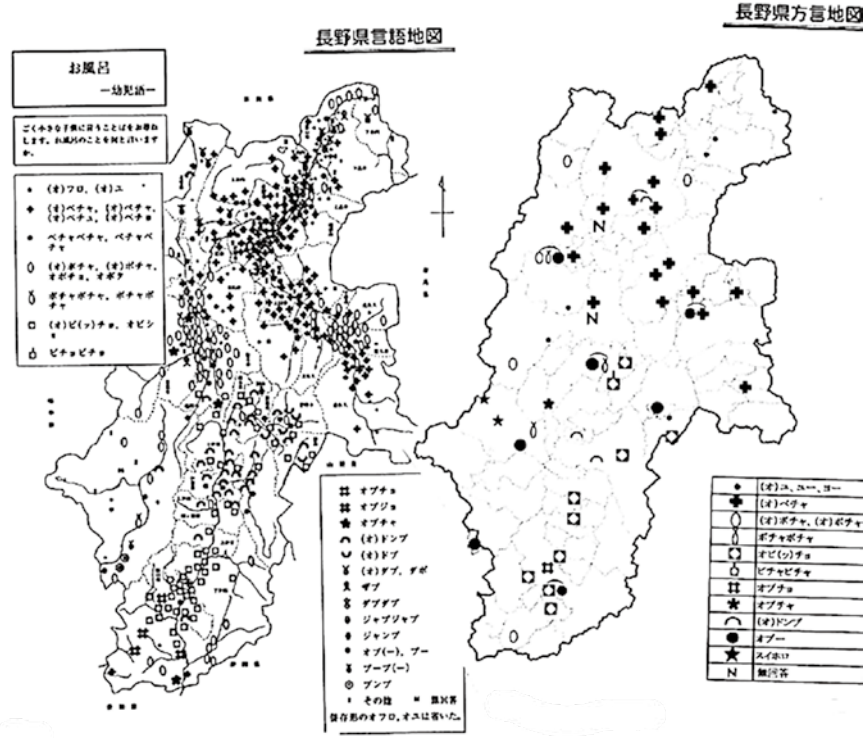

図13：「お風呂」の分布　（『長野県方言辞典』より）

（6）ものもらい

まぶたの上にできる小さなできものについて、上田では「メカゴ」「メッコジキ」と言い、木曽では「メコジキ」、開田では「メチンボ」「メチッボ」と言う。これは鬼無里周辺にも分布しており、今も残存している。

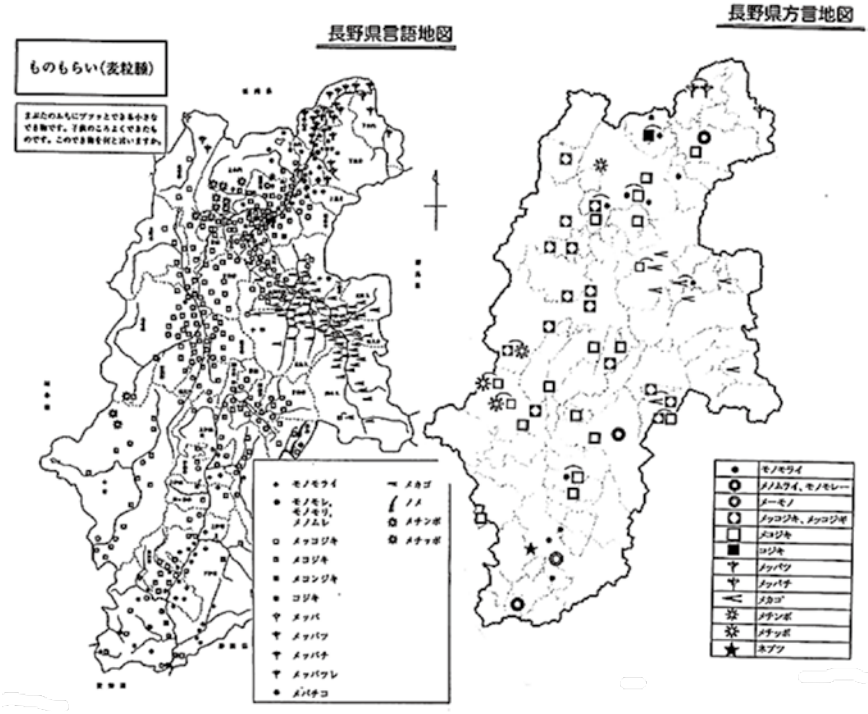

図14：「ものもらい」の分布　（『長野県方言辞典』より）

（7）お手玉

県内でも30程度と、非常に多くの語形を持つ語である。上田では「オテダマ」の他「オタマ」「ダンマ」が目立つが、木曽では「オカヨシ」「オカンシ」「オタマ」などが北部を中心に分布している。

「オカンシ」類はかつて木曽北部～中部、佐久～相木に分布していたが、消滅しかけていると言える。

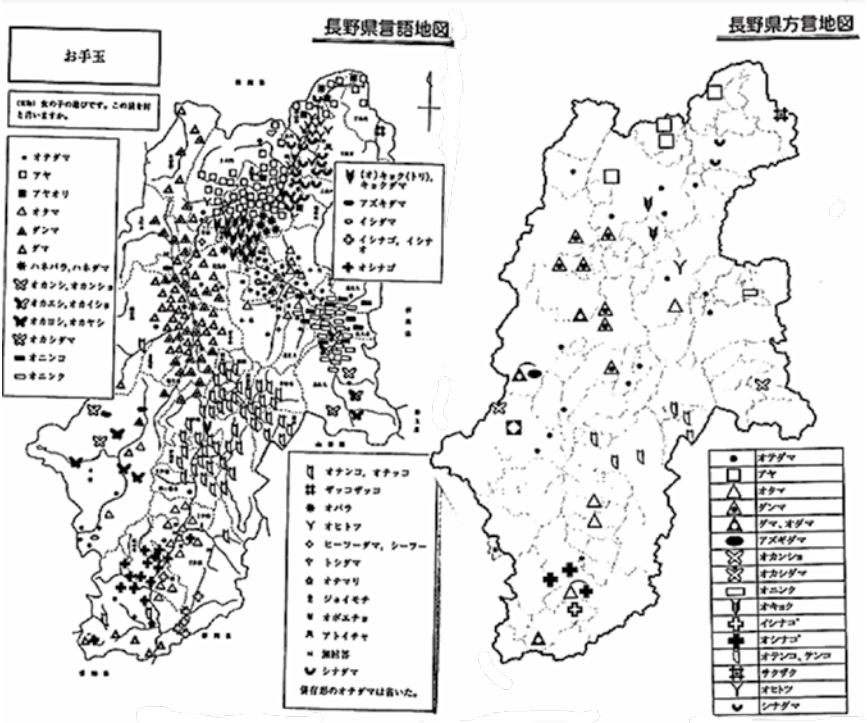

図15：「お手玉」の分布　（『長野県方言辞典』より）

（8）おたまじゃくし

「お手玉」に続き、非常に語形が多い。上田では「ゲーロタマ」、木曽では「ゲーロッコ」「アマッコ」が多い。開田では「ドッブキッコ（ドッボギッコ）」という珍しい語形も見られる。カエルを表す「ドンブキ」の撥音が促音化され、「ドッブキ」で、その子が「ドッブキッコ」であろう。

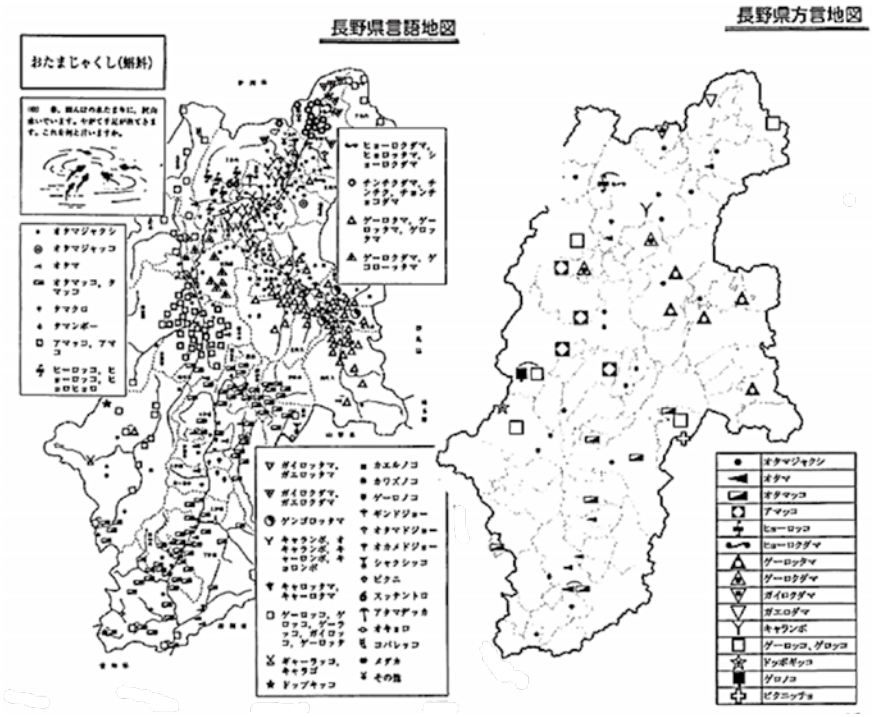

図16：「おたまじゃくし」の分布　（『長野県方言辞典』より）

7．談話から見た木曽方言

最後に、木曽方言の中でも特徴的な開田地域の方言談話について紹介したい。

談話の状況としては、Aがたばこ屋に行ったが留守のため、お金を置いてたばこをもらっていこうとしたところにBが戻って来る。Bは亡くなったAの兄の話をし、お茶でも一服するよう誘うという場面である。(特徴的な音声について、筆者により下線を付した)

◆開田村西野のテキスト方言(『長野県史』より)

A:イタガー。イタガー。イタランカー。(独り言)トウィャー、 タッボイェ 水 メーデモ 行ッツラガナー。(大きな声で)イタガー。イタガー。ダレモ イタランカー。タボゴー クリャー。(応答なし) ヤッパリ イタランカー。シカタ ネーナ。黙ッテ 持ッテ 行カスカ。黙ッテ 持ッテクゾ。イェゴー フタッツ。200ウイェン。コゴイェ ウォイトグゾ。アリャ、ババ 戻ッテ 来タガ。

B:アリャ メズラシー。丸井ノ 五郎ジャネーガ。ジンニ 兄ニ 似セテ キタニャー。

A:ソーダ。ジギ ワガッタガー。ワレモ シッダ ババーニ ヨー 似セテ キタニャー。

B:ソーガ。ソーヤー 気ノ毒ニ。コドシャ 兄ノ アラボンデ……。去年ノ 今コ゜ラ イッドニ 善光寺イェ ミャーレー 行ッテキッタカ゜……。

A:アノ時分ワ 兄モ マメダッタイェ。イギテイタ トギワ ホントニ エリャー世話ンナッタニャー。

B:チョード 茶ドキダニ チーット アカ゜レヤ。

A:忙シーズラ。ソーソー ダボゴー 黙ッテ 持ッテ 来タデナ。

B:イェーヨ、イェーヨ。コゴラノ シォモ ミナー ソー セルンニャ。

A:ウラモ フントワ タマニャー ノゾカニャーナー。村デ 生マレテ 村デ デガグナッテ 隣リムラデ 暮ライテイタンデニャー。茶ーノ イッピャーモ ヨバレテ 行カルカナー。

B:ソー セリャー。キンコ(繭)モ ディャーテシマッタシ タッボモ チーット ヨーア ネーデ。

A:キャーコモ ヤッテタガ。イェリャー セーカ゜ 出ルジャネーガ。ババーモ

一服　センカ。

8．まとめ

以上、木曽方言について、東西方言の特徴の分布、開田地域における音声的特徴、言語地図から見て取れる特徴について、主に上田方言と比較しながら紹介した。歴史的に見れば、木曽は中山道の街道筋に位置し、京と江戸を往来する人が行き来したために、東日本と西日本の方言特徴を相互に保持し、現在に残していると言えるであろう。また、街道筋から離れた、いわゆる秘境とかつて呼ばれた地域では、室町にも遡る古い日本語の姿を見ることができる。共通語化の中で、これらの特徴が今後どのように変化していくのかに注目したい。また、2006年に権兵衛トンネルが開通したことで、伊那谷との往来が活発化しているが、今後は人・モノのみならず、木曽のことばも変化していくのかは興味深いところである。

【参考文献】

牛山初男(1969)『東西方言の境界』
国立国語研究所編(1999)『方言文法全国地図第４集』
国立国語研究所編(2004)『日本のふるさとことば集成　第８巻　長野・山梨・静岡』国書刊行会
徳川宗賢編(1979)『日本の方言地図』中央公論社
長野県教育委員会(1986)『長野県方言緊急調査報告書』
長野県史刊行会(1992)『長野県史方言編』
長谷川由香(1997)「木曽の方言」神田外語大学大学院言語科学研究科修士論文
馬瀬良雄(1958)「木曽開田村方言の音韻」(『国語学』34、後に『中部方言考』所収)
馬瀬良雄(2003)『信州のことば－21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社
馬瀬良雄編集代表(2013)『長野県方言辞典[特別版]』信濃毎日新聞社
矢島満美(福沢武一補註)(1974)『木曽の方言』＜1943年版の再刊＞図書刊行会